

# お昼寝中の研修会

永野むつみ

「私たちの創った人形劇を観てください」

ときどきこういう電話をいただく。この日は、公立保育園の主任保母さんから。

「全員参加の研修にしたいので、昼の時間に来てください」

「あの……子どもたちは？」と私。

「昼寝中ですし、園長と給食の先生が保育にあたってくれますから」

「喜んで」

昼寝中の保育園は静かだ。つい私も、抜き足、差し足。声を殺したあいさつもそこそこに、会場のプレイルームへ。ところが、ドアを開けるとそこは別世界。張り詰めた空気の中に華やきがある。先生たちの圧倒的なエネルギーに私は息をのむ。どきまぎしている間に「研修会」は始まる。

にわか仕立ての舞台上で

衝立が立っている。高さ百二十、間口百八十七センチ

チメートルほどか。重ねた机を両側に置き、間に物干し竿を渡してある。目隠しにカーテンがかけられている。フックもそのままに、ついさっきまでカーテンとして使われていた様子がうかがえ、思わず口元がほどけてしまう。

若い先生が登場し、始まりのあいさつ。観客は私ひとり。

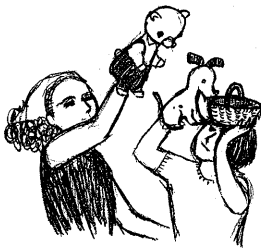
この日の演目は、中川李枝子原作の『そらいろのたね』。演目選びや人形、舞台のつくり方など、最初に出合った作品の影響をととも感じる。どの劇団のどの作品に触発されたのかよくわかる場合が多い。

「いかがでしたか」

二十分くらいの人形劇が終わると、今度は皆の目が私に向けられる。私は言葉に詰まる。ニコニコしながら胸の内は、この依頼を受けたことを後悔し始めている。感想や意見は山ほどある。しかし、自分

のスタンスが決まらないのだ。私は今ここで何を言うべきなのか。もち時間は一時間半。私にどんな「助言」を求めますか、と逆にこちらから質問がしたくなる。

一生懸命さには胸をつかれる。見よう見真似で作りましたという人形。膝立ちか、アヒル歩きで移動するしかない低めの衝立。万年腰痛気味の先生には辛いだろうな。せめて衝立を百五十センチメートルくらいまで上げると楽なものにな。しかしこれは子ども視線も考慮したものなのだろう。そして昼休み返上の研修会。本来なら園児の昼寝の時間。先生にとってもほっと息のつける時間のはず。たとえ保育記録や連絡ノート記述等の雑務はあったとしても。



カット 山根裕子

ここまでくるのにどれだけの時間と労力が削かれたのか。それらを思うと、ただただ頭が下がり「助言」など口幅ったい気がしてくる。もともとこうあるべきというものはない。好きなようにやって構わない。

「皆さんとても熱心で、子どもたちにはきつとそれが伝わるでしょう。ボクたちの先生が、ボクたちのために一生懸命演ってくれている。その事実が子どもたちをどんなにか喜ばせるでしょう」

こう申し上げるのが精一杯。自分の内の迷いをふり切りながら「これで良いのです」と言い切る。専門家ではないのだから、演っている人たちが楽しければそれで良いのだ。この想いにウソはない。しかし、しかしである。先生方は幼児保育のプロではないのか、という想いと、演っていて本当に楽しいのだろうかという疑問が、やはり頭をもたげてくる。彼らもこれで良いのかという想いがあるからこそ私を招いてくれたのに違いない。やはり感じたことは

伝えなくてはならない。口にながく、耳に障っても。

### どうしても気になること

一つはセリフまわし、妙な抑揚がつく。芝居があった物言いとでも言おうか。あるいはヘタな声優風。申し合わせたようにみな短調で、単調だ。聞いているこちらの方が恥ずかしくなるほどベタつく。

声色を無理に作っているせいかも知れない。でもどうして声を作るのか。「人形」劇だからか。人形には普通じゃない声が似合うというのか。あるいは誰かにそうするものだと思えられたのか。それとも園児に先生の声だと悟られないようにか。節をつけて言いたくなるのは、原作の文体に捉われているせいだろうか。

ちなみに絵本の、「」付きの文章は、そのままではセリフ、つまり話し言葉として使えない場合がある。同時にそれ以外の文章を単純に「語り」として

使ってしまったと、人形劇というより説明の多い立体紙芝居風な仕上がりになりかねない。

いずれにしても理由を問うと、とりたてて意識していないと言う。それならば私は、できるだけ普通に、さっぱりとしゃべって欲しいと思う。人形がすでに形象として役を表現しているのだから、自分が一番楽に話せる声でしゃべったら良い。その方がはるかに个性的で魅力的で表現的に違くない。何よりも、何を言いたいのか相手役にも、観客にもきちんと届く。会話が成立する。このことが最も大切なことだと私は思う。園児と毎日向き合っている先生方ならできるはず、先生は役者ではないがしゃべりのプロなのだから。

### もう一つの気になること

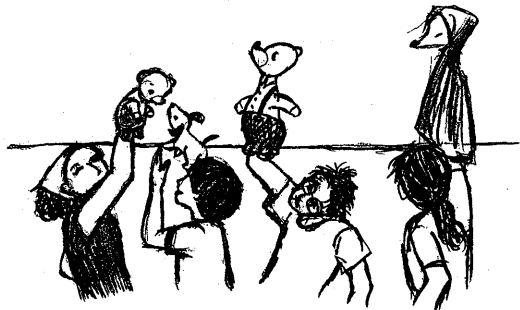
これは止むを得ないこともあるが、人形の動きがうけ入れがたい。哀しくさえなってくる。一言で言えば、どうしてあんなに無駄にガチャガチャ動く

(動かす)のだろうか。原因の一つには人形の遣いにくさがある。もっと気楽に演るためには、身近に使い易い人形があること。劇人形を貸し出す図書館のようなものがあれば良いのだろうか。

もう一つ考えられるのは、やはり先生自身が優れた人形劇

に出合っていないということではないか。あるいは観ていて観ていないということ。どう動いたらいいのか判らないというのが本音かも知れない。

「劇」は嫌だけど、人形劇ならという言い方もよく聞く。観客に見えるのが人形で、自分ではないとい





関心を生むところ。

人形劇にとって、人形の動きこそが、その表現の要であるにもかかわらず！

### 技術も必要なのだ

人形劇の演技技術の習得は、楽器のそれと似ている。ピアノを週に一回、二時間ずつ習い始めて、十回で発表会を開くだろうか。ところが人形劇の「講習会」の場合はあるのだ。十回の人に人形作りも入っていたりするからさらにおどろく。確かに「劇」は観客なしには存在しないし、即興も得意とするところだ。ピアノの場合も、打楽器的な使い方とできるし、指一本での演奏も可能だろう。音楽を

う人形劇の特性の功罪をそこにみる。功は、私にもできそうと思わせるとつき易さであり、罪は演技技術の軽視、あるいは無責任、無

楽しむ心、センスがあれば技術の習得をまたず、ある種の感動は伝えられるだろう。ところが一方人形操作ほど、演技者のつもりが見えないという世界もないのではないか。その点ではケーナとか尺八とか、容易に音が出ない楽器に似ているかも知れない。

### 一番おいしいところを

誰かに「普通に」歩いてもらおう。もちろん人形で。観ている先生方に「いかがですか」と投げかける。「いいですね」とほとんどの先生が応える。「本当ですか」と、少し語気を荒げて問い直す。私の気配に押されたのか、何人かが「ええと、そうですね……」と考え始める。業を煮やして「私にはどうしてもこのように歩いているとしか思えません」と、その人形の動きを、私の体で真似てみせる。どうみても普通ではない。皆笑い、そしてようやく気がつく。普通に歩いているように見える動きと、そうは

見えない動きがあるということ。人形も普通に歩くことができるのだ！ 普通に歩くことができるから「トボトボ歩くこと」も「酔っ払って歩くこと」も「いそいそ歩くこと」もできる。つまり人形の動きだけで哀しみや喜びを「表現」できるのだ。くれぐれも、わずかな人形の動きと、観客の想像力をあなどってはいけない。演技者の内面を、本人も気づかないうちに観客に伝えてしまったりもするのだから。同時に、どうみても演技者のつもりが、そうは見えないということもある。これらのことに気を配りながら人形を動かすおもしろさ、つまり人形で演じるおもしろさとむずかしさをせひ味わって欲しい。これこそが他では味わえない人形劇ならではの楽しさの中核だと私は思う。どうせわざわざ時間と労力をかけて取り組むのなら一番おいしいところに食らいついた方が絶対おもしろい。できるならば

「発表」を急がずに。

## 反省と心配

「人形劇ってずい分奥深いものだったんですね」と参加者。

「あれから先生たちは頭を抱えちゃって」、と園長の後日談。私は先生方のやる気をそいでしまったのだろうか。何でもいいのです、やりたいようにやれば、と励ましつつ、いくつかの具体的な「助言」に留めておけば良かったのだろうか。つい夢中になって先を急いってしまった私は、保育現場にうとい、ただの人形バカなのだろうか。この原稿を書きながら、私の心は揺れている。

(人形劇団 ひぼぼたあむ)